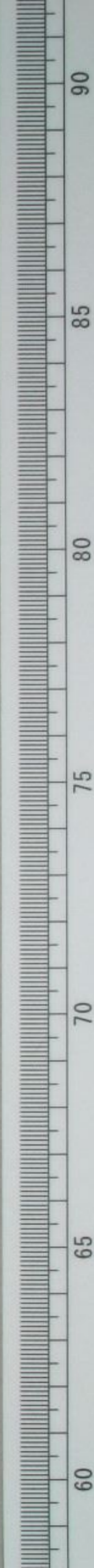


特別  
八 4  
5343  
2





特  
八  
三  
二

甲子年

横山家藏

58-2026





註畫讚卷第四

赴依智第十七

あつらひ龍たつのて出て。十二日の午ひまに刻とき。相まう列り  
 愛甲ういの郡ぐん。依智いぢのち。本間ほんま六郎ろくろう九衛門くゑもん尉ゑい重連じゆうれん  
 がたらうて。流ながのののも。流ながののへへくくやや。日ひ来き  
 を我らぐたののをを。阿弥陀佛あみだぶつををすすてて流ながてて。  
 け流ながののへへくく奉たまつつ。昨日きのうのの夜よのの思し議ぎ  
 の事こと共ども。まののああつつふふねねぐぐ奉たまつつままののややく  
 存ぞんぞぞううゆゆへへくく。中ちゆうののつつるる念ねん佛ぶつをを。其その  
 とくとくををももすす。念ねん佛ぶつををへへくくすす。誓ちか言ごん

主... 日



をなつてのち。九月十二日の夜なほ。雲霧も。月ノ光も。自我偈。明月天子。法花。經ノ會座。属累品。當具奉行。今。佛勅。日蓮。

あ。大集經。日月光。をうし。説の。月天子。せ。の。聖人間て。明星天子。童子。物語あり。目と。縁。



数珠を切て受法をもつておぼつた後  
 後にも大風あり江ノ場ありて空  
 ひびく事。たいことつりあり。其朝  
 あり。錦倉より人來りてつりあり。  
 のみ夜戌の刻は守殿より大なる  
 したあり。此のやのく。国方  
 此の坊のあり。世間あり。百  
 日あり。又百日のあり。

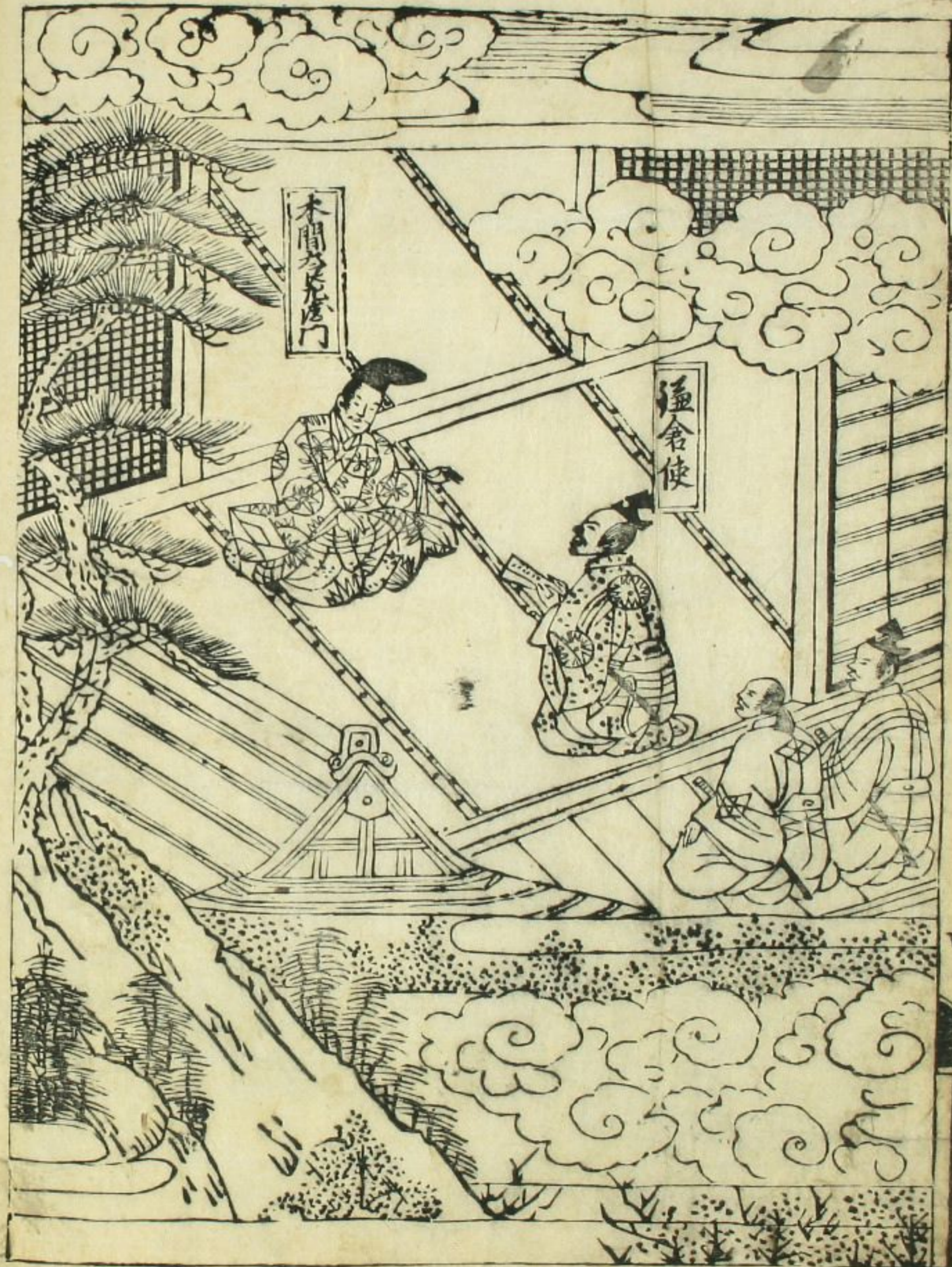
ことありしと決りて。同日に日頼綱重連を  
 くの状をいし。日蓮は佐渡へを  
 兩三年もあつた。はちやあつた。の  
 たまりつて。その中のあり。あつた  
 あり。おこつた。あつた。あつた。  
 ためあり。あつた。あつた。あつた。

九月十四日  
 左衛門尉頼綱判と書り  
 本居六郎左衛門尉汝







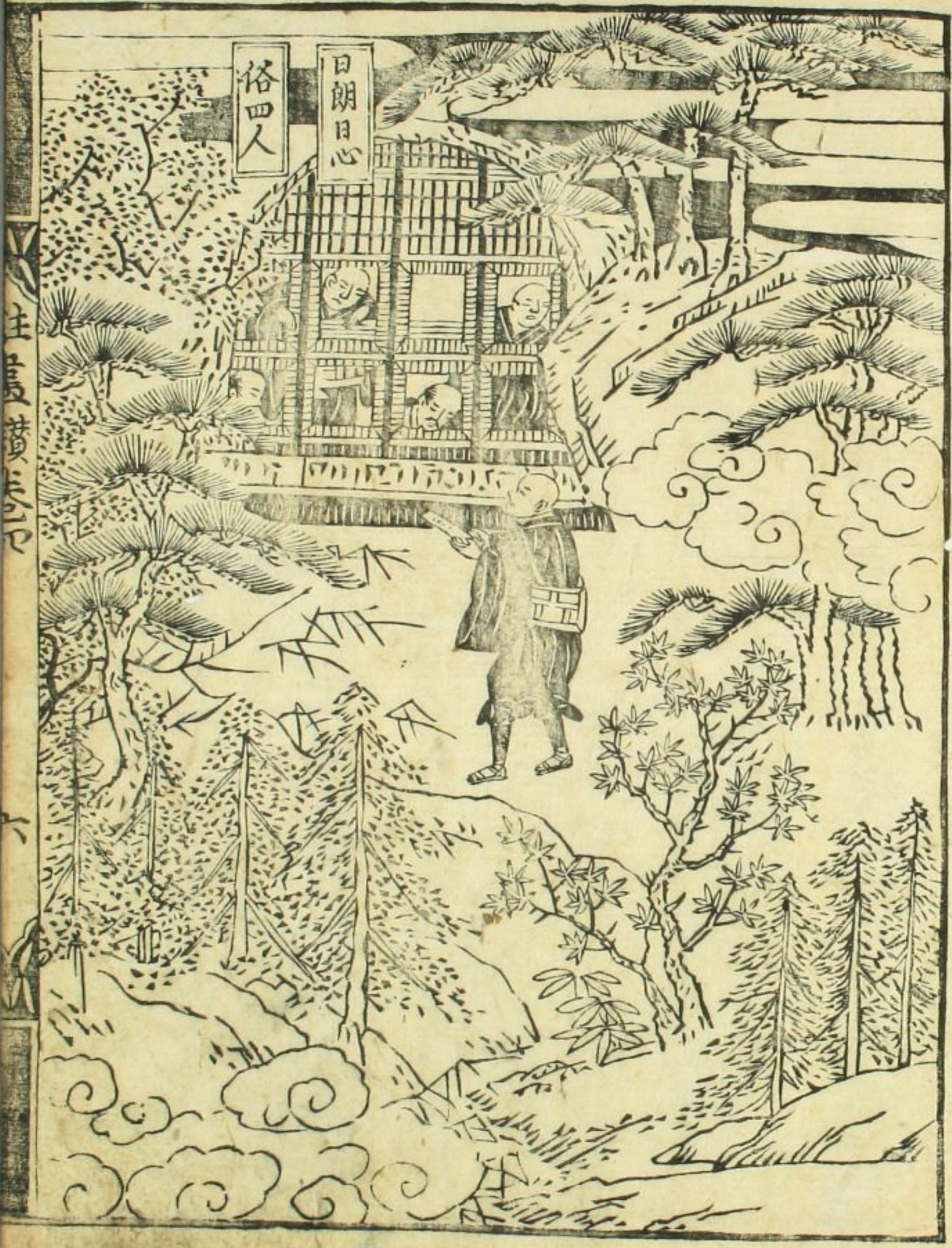


菟中遺狀第十八

同年十月三日。依智らるる。鎌倉の籠中  
 あり。五人の中へ狀有。此月十日。佐渡の嶋へ下  
 りたり。そのころ法華經一部つ。あまうりく  
 し。我身もひい父母兄弟らも。あまうりくし  
 ま。今夜のさむきさうり付て。いよしく。い  
 しと申せり。菟中と出さるを給り。明年入春  
 り。あまうりく来る。あまうりく。あまうりく。同九日。日  
 別く日朗く。あまうりく。あまうりく。日蓮へ明  
 日ハ佐渡の嶋へまうりく也。今夜のさむきさうりつぎ



ても箆の中れ有さぬ思ひひかへんかへん  
 せんたれ殿ハ法華經一部をさへし入二法  
 としもあそくしんしん身なまじま。父母六親一  
 切衆生をたすけぬへき法身あり。法華經を  
 入るものも口をうらむものもあそくしんしん  
 ぞ。ゆきやのめと。かすしんしんしんしん  
 の二やう。あそくしんしんしんしんしん  
 天諸童子。以為給侍。刀杖不加。毒不能害。とせられ  
 る。あそくしんの事。さ有くす。箆を出てあそくしん  
 しんしんしんしんしんしんしんしんしんしん



主長黄



佐渡流刑第十九

佐渡嶋を知行せし武蔵の前司が、あつらふに  
 故に其ひくつしものありて、同寺十日、依智  
 を出し、の嶋にたむじき給ふ其教武蔵国来目  
 河を至らるよりありあのこ。十二日と申す。越後  
 の国寺泊入津に付の、同寺廿二日、寺泊より、  
 日常よりをりぬの状より、是より大海に  
 ばて、佐渡の国へばらしし、順風宮ありせん、  
 其期ちりとも、道入りの事にも筆もをりし  
 ぐ事。ちりしにをりし、志らるる、後

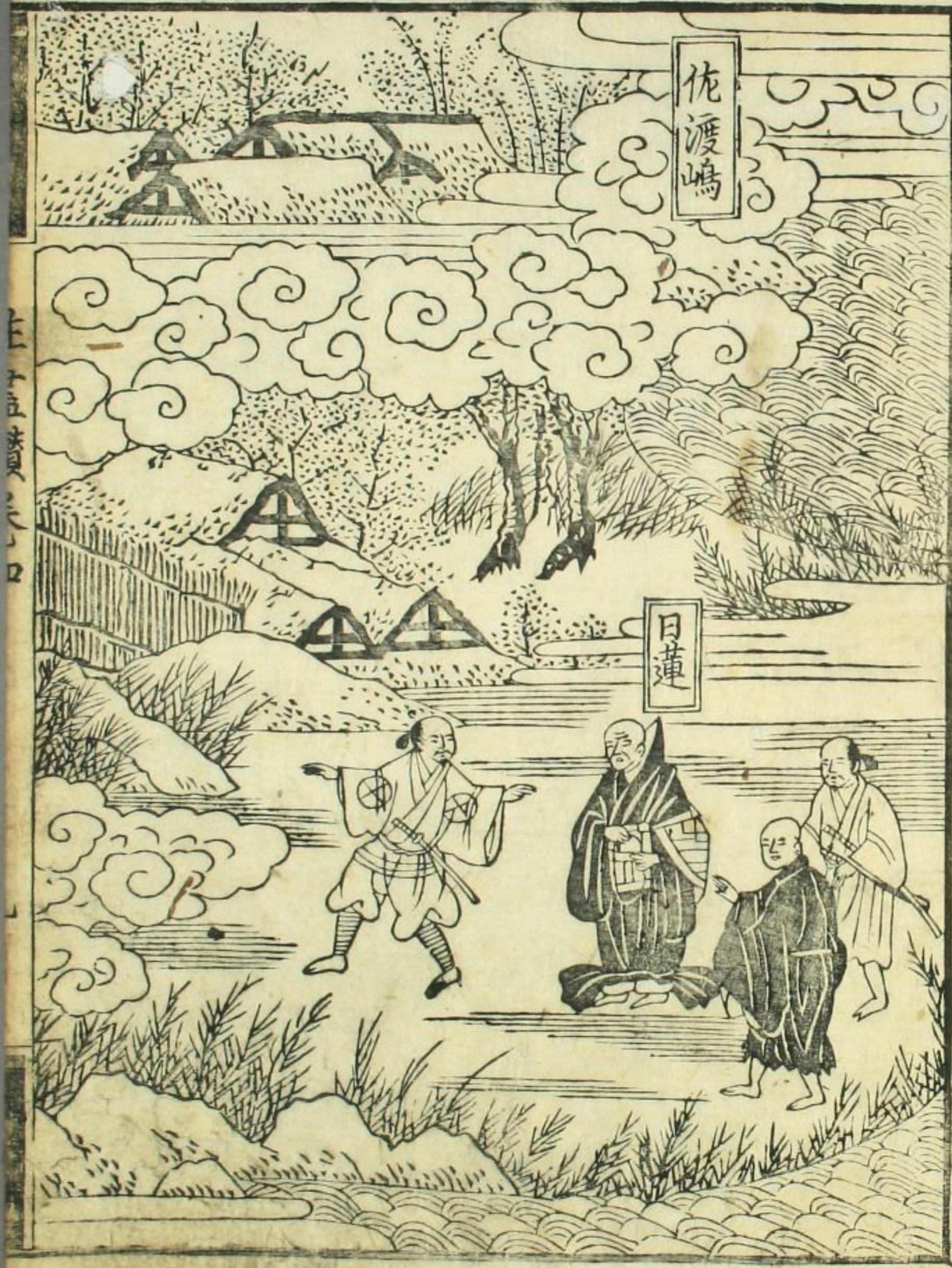
津より舟よりり給ふ。風おちりし。起浪あり、  
 て舟よりへさんとも。聖人なるは、自我傷む  
 ちりし。給。青衣赤衣のやうに童子来てと  
 ちりし。ちりし。やうに童子来てと  
 て。風やも波ちりし。まらとも。まらとも。まらとも。  
 うら。付の。本間の重連をくる。人あり、  
 まつてまゆとひろめ。ゆひとさひ。まらとも。まらとも。  
 国新穂郷。さへありし。まらとも。まらとも。まらとも。  
 ちりし。形也。ちりし。まらとも。まらとも。まらとも。  
 堂あり。ちりし。まらとも。まらとも。まらとも。



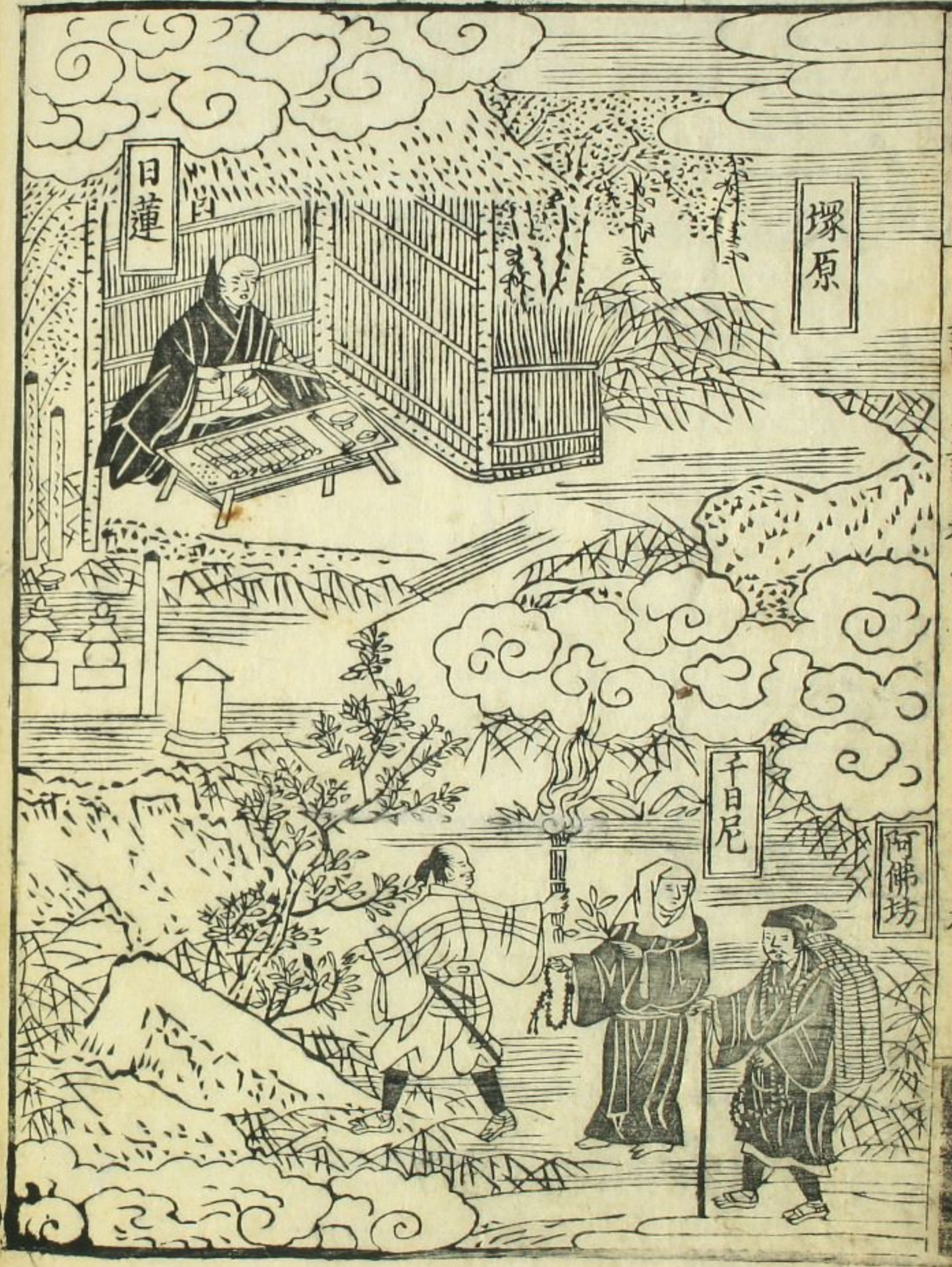
佛のよく傍もひた堂や十一月一日移給書  
 夜耳のうつろを松の風目らなる庭の雪  
 食らふしけき命たのらるる夜やめれ連  
 のかき張おがひのかり張く堂の釈迦  
 をあしぢくは法華經とてまじひくや  
 日光とあひひて法華止觀をまかこりし  
 夜も星月らむらつて妙法の題号とら  
 ことらまれし志はくもつとも主人  
 ろんぢくも父母らもまれんや

すとらるる故にまじひらるるの  
 何れも何佛房夫婦のく見聞とつ  
 日蓮うあしつらやまらひる人  
 是れ心何佛房ひきとちか夜中まじひく  
 度とあらひる慈悲の依渡の周生  
 数数見損出入の二字のまじひく  
 是我方當いと有くの聖人曰法華經の故  
 度と流とまじひる数数の二字のまじひく此明文









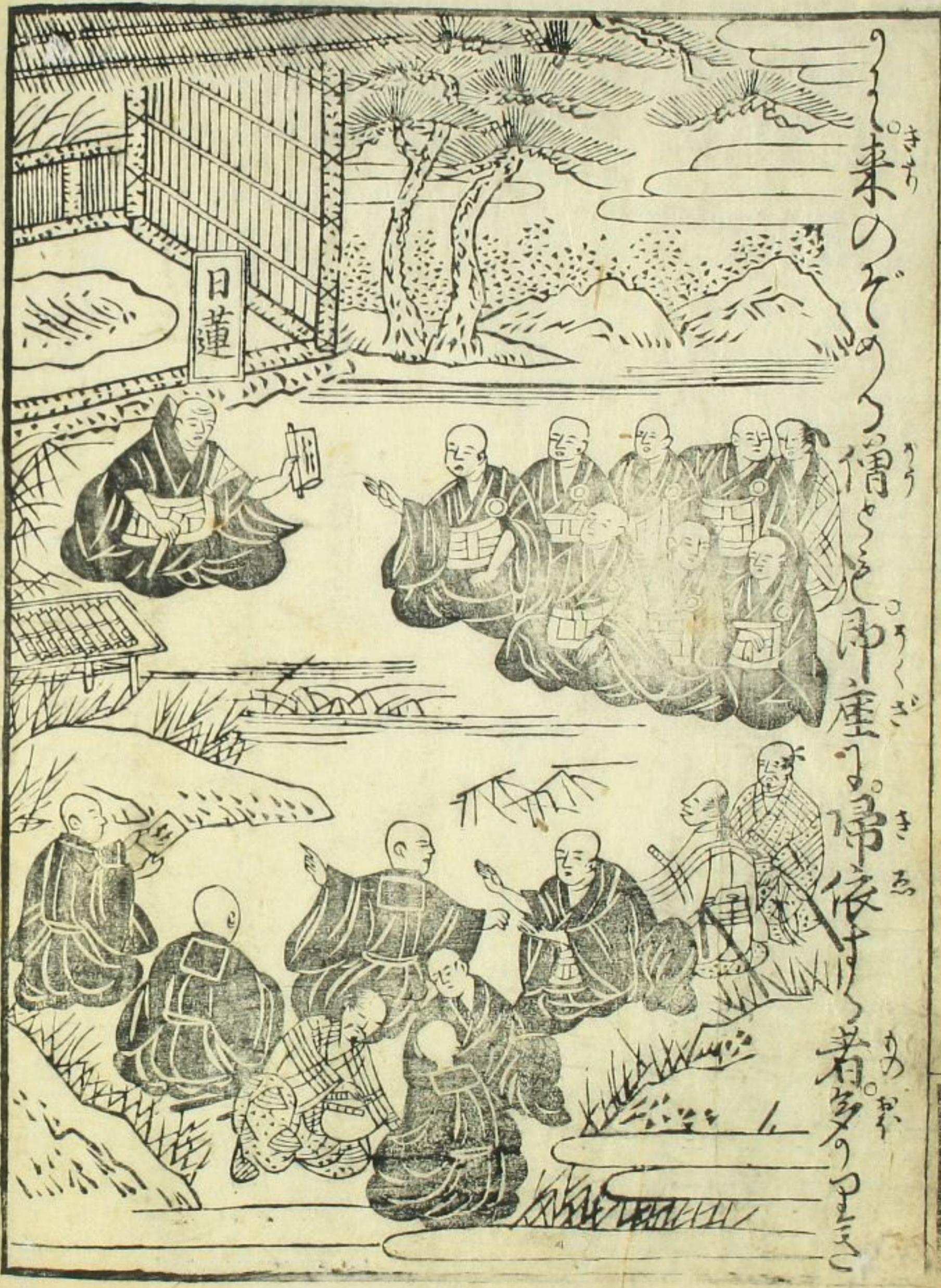
諸宗問答第二十

國中入念佛者百人あまのあひまきくせつういけし  
 と。守護所へ詔。重連のうけくちれどもへまへまあ  
 ざるの由。鎌倉よりまへまへまあまの事ありし  
 重連の大事なるべし。それより只法門をのりてせむ  
 へしとまらる。文永九年壬申正月十六日。常陸國并  
 隣國越後信濃ホの僧俗。そのまへまへまの塚原  
 につらひあひまつ。各々つらまへまの事をまへま  
 聖人の止觀真言念佛禪律ホの文義。こまへまの  
 能く能く瓜を切。大風入るをまへまのひつらまの

主言問答卷四

丁





来のぞの僧の師座の帰依する者多のり

重連進來第二十一

各たいきんすう時。重連よ向てり。鐘倉よ  
 所しろう。各てり。七月とりの。聖人の所をく。  
 鐘倉よ近日り。とこまへ。のそまのつ。高名せ  
 り。重連よの。まひ。の。案。二月十一日  
 京都。鐘倉。たる。く。大將多死を  
 於事。あ。花。風。ちり。や。こ。  
 是。聖人。高山。の。天。む。つて。大  
 を。と。出。く。法華經。乃。文。む  
 ち。諸天。の。ち。ひ。た。り。す。ハ。ま。



まらふわらふちるりしより。ちりしをみせぬ。し  
といのりぬへし。眼前よりしきやくれ難おる也。  
天のせめる事。うごひる。ひあしきもの多。  
是を信ぜし。相摸守。日蓮上人を流罪し。  
百日の間は兵乱あり。あひぬたつものつて。せく  
を思へわが門人々。福遇十號。うごひる。う  
のち二月十八日。本間がう。ひらり。きき  
今日あつろをあつろをくはす。けさをものく。せん  
ゆる正月十六日のあつろ。此あひごころ。  
うひなくまつも。二十日。あひぬ

蒙古國も一定来るへし。念佛無間も必きこ  
るべし。むろく念佛申へし。日蓮の法  
法華經をひろびろ者。釈迦如来の法使る。日  
蓮ををろり。よすや。國やろかへ。  
いしや。あつろ。是も。あつろ。  
あり所のるし也。此後蒙古。世國を責も。汝も  
あしをしなつ。つすとのあつろ。聞人。し  
く。此あつ坊を神通の人也。あつろ。し  
今。念佛者。あつろ。し。





仲性坊第二十二

依渡公伯耆。依列下向の時。聖人入の海り。念佛者  
 あり。仲性坊といふ。汝二人たひのす。こゝを。かゝこ  
 ろゆ。法問一言のゆへ。伯耆公高座。こゝ  
 依渡公ろんたしせよ。すふり行。浄土宗の法義を  
 ち。ひらの砌。二人立きて。だんき。聽聞のま。り。は  
 をり。仲性坊。い。ま。こ。つ。つ。こ。ま。の。志。も。き。や。う  
 志。や。あ。る。や。こ。こ。へ。て。つ。こ。こ。鎌倉邊。ら。ま。あ。し。り。ふ  
 仲性。つ。こ。こ。鎌倉。つ。こ。こ。日蓮坊。つ。こ。こ。の。念。佛。無  
 問。の。あ。く。ま。お。こ。て。當。国。へ。あ。こ。い。ま。り。あ。る。

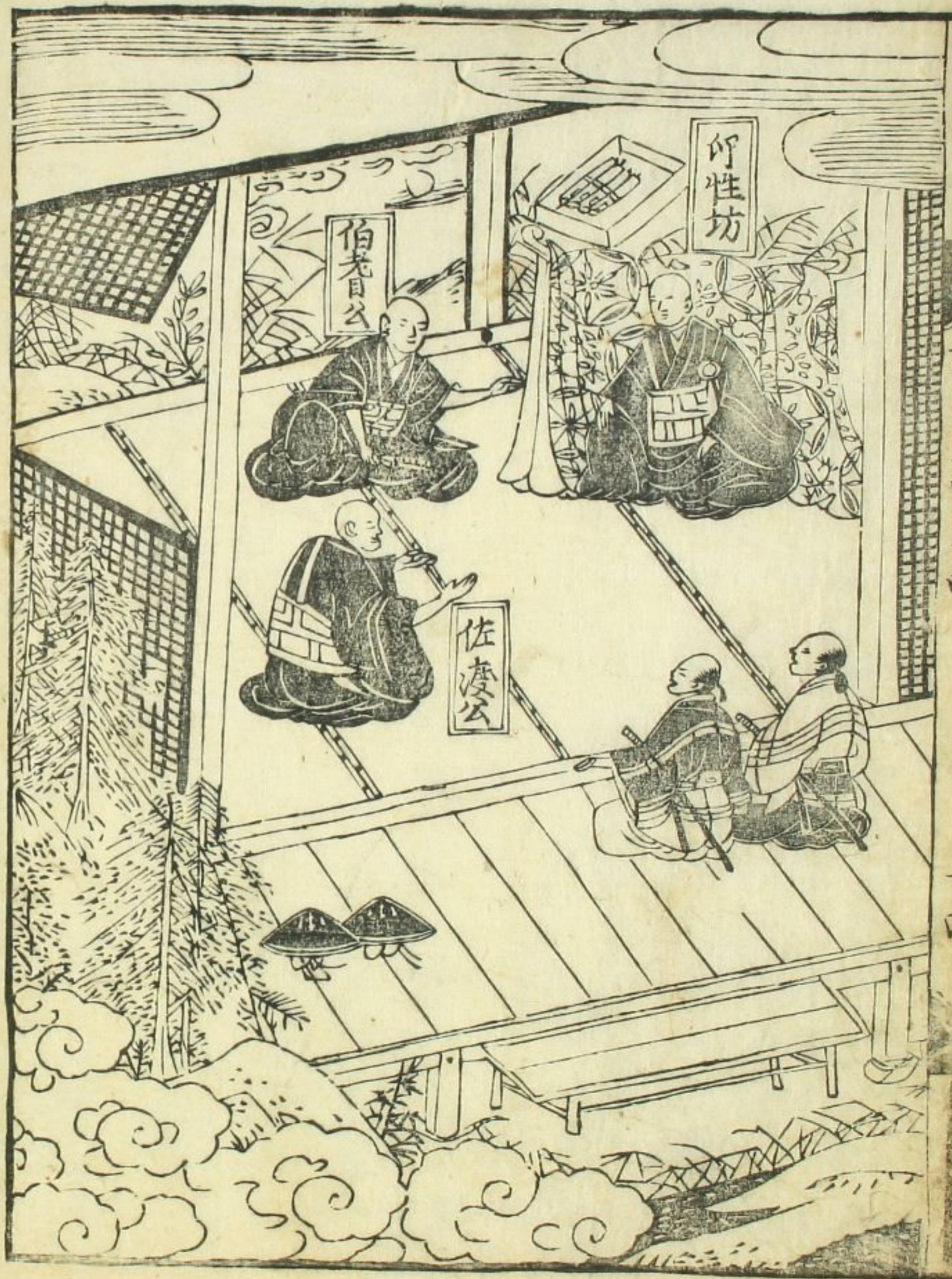


是をみるや。こゝへていさく。わさくを奥列の  
まのるり。此あひびく。鎌倉へのりらあひびく。志々  
すやうり。印性いさくありやあし。彼法師の  
此ちりき。里あり。殊施のひく。しはま。あし。く。大  
さ。いの人なり。提婆を物の数る。び。二人のいさ  
や。く。のあ。き。を。何。く。せ。あ。さ。然  
印性いさく。いろ。て。な。し。の。を。し。二人のいさ  
あ。色。を。佛。法。ち。う。を。し。の。と。ら。め。う。へ。の。び。り  
志。く。を。あ。し。の。く。ら。び。の。大。昔。ま。の。ひ。く。し。あ  
ひ。し。や。く。と。り。印。性。此。法。坊。日。蓮。坊。う。弟。子。也。

と。り。て。内。へ。つ。く。二人のいさく。あし。ぢ。あ。し。ら  
二。經。の。海。う。り。故。く。一。句。の。法。門。を。あ。め。も。あ。し  
ち。あ。ら。う。故。く。お。り。の。人。を。し。く。海。を。し。び。き。  
あ。ひ。し。る。り。此。い。あ。し。の。う。く。印。性。う。弟。子。且  
那。百。余。人。守。護。形。う。い。て。く。と。海。く。の。訶。訶。ま  
を。し。ひ。守。護。形。う。く。向。答。あ。つ。く。ま。う。や。う  
の。と。り。至。極。ま。う。故。く。印。性。う。弟。子。且。那。と。し  
ん。ぎ。う。海。お。ひ。く。ら。れ。を。あ。し。ぬ

注しき書しつ





尼問答第二十三

問答の後二三日過て日蓮坊法談入時聽衆  
 の中。尼一人すゝゝの問ていまく。去ゆる法  
 法華經乃三の卷のつゝ。女と云字する。と  
 作のり。聖人すの尼のやの色をみくの場をく。  
 是ハ先日問答の法にまるとつ。亦性坊をまも  
 りしため。来る尼と云ふ。おつとの無念  
 をもつ。こゝろしため。来まると。あ〜と云ふ  
 ぐ〜と云ふ。法華經をなつる。この法を。と  
 ちもなつて。ちつと云ふ。聴衆乃中にて。亦性





女房にようありとて日蓮にちれんののきりきり光あきり  
 けりけり



前司狀第二十四

父承十年癸酉夏五月廿五日。予國の内石田の  
 一谷の村に於て。百姓の入道の家を宿として。住居此所  
 松の木一本あり。げさうき入松といふ。ついで木  
 のしりて。天よりむらつて。きせあり。其は念佛  
 者の僧より鎌倉よりあり。武蔵の前司より  
 くる。日蓮坊より。彼鳩す  
 まし堂塔ひともある。僧一人もむら  
 へす。阿弥陀佛をいふ。水もあがり。

とよらひる高山よのやつく。大音聲をあき。日本  
 國よりしる。前司大臣より。此とひひ  
 ろみ。守護代へ状をたのむ。良觀此状と  
 其狀より。沈渡の国の流入の僧日蓮。孝子  
 をり。今より。後彼僧あり。あひら。



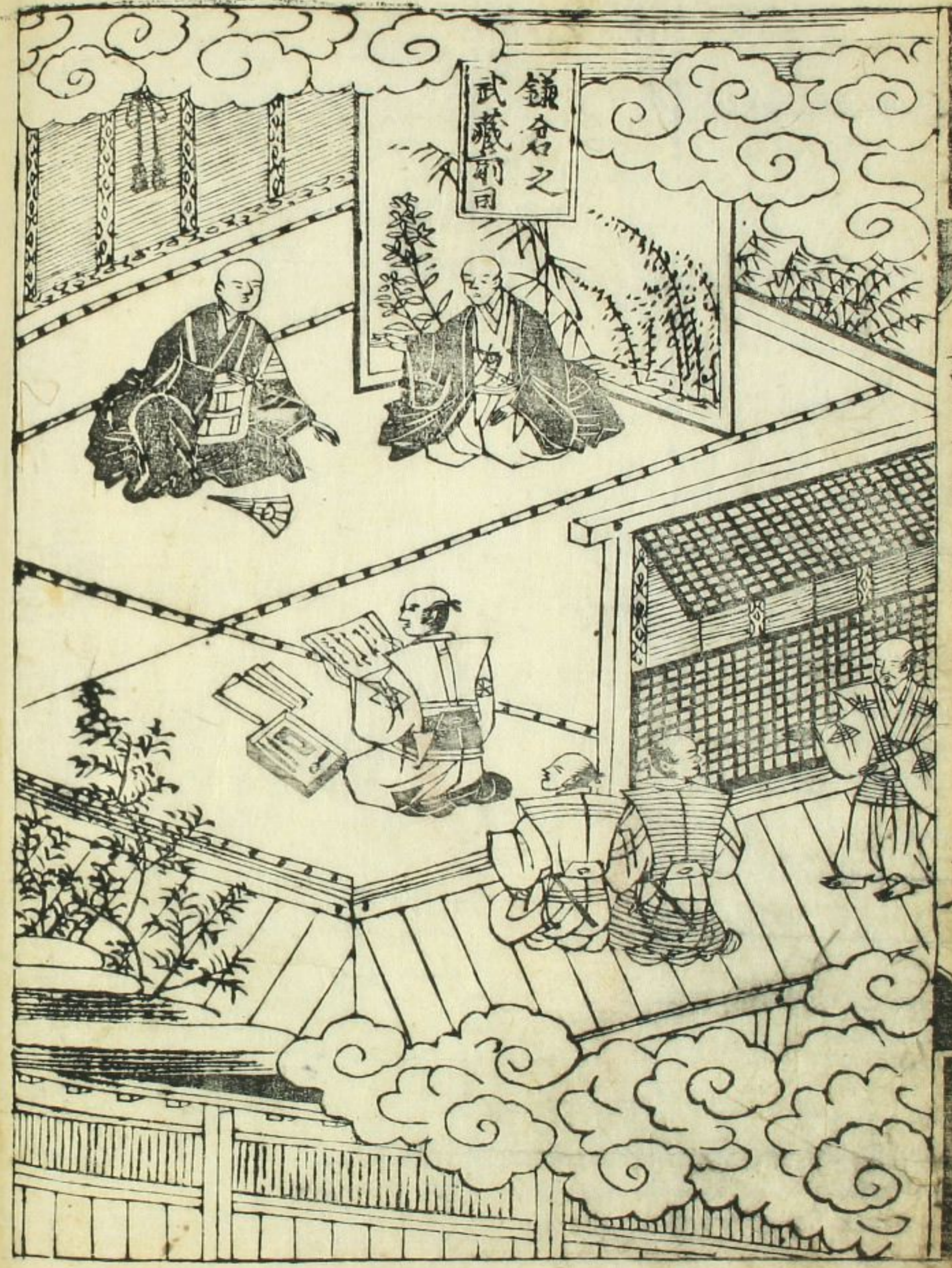
きののりーの所や。仍る如件文永十年十二月  
 七日。依智六郎元宗門尉。沙弥觀慧判。淨狀  
 をあさきとく。國中下知のつう。あきくかろふ  
 龜うび。あつひを日蓮坊の一海。沈渡るまよ  
 の所へわつろののあつ。是をばさへつひ。鐘倉  
 よるあどくわつろのいあ。むしとく津こ  
 とふせき城すへ。舟こつろ。是をさかんせい。あ  
 るひを市町の。ごらひもとく。のつろ。だそ  
 らく。あ。けつけの丸横の。大るし。よとあゆも  
 のり







五十五頁六



鎌倉之武藏前同



赦免狀第二十五

文永十一年甲戌二月八日。相摸守の夢。日蓮  
 のこと。物さ。に。来る。日蓮  
 清坊志。三聲。聖人  
 あ。天。白。事。  
 何。事。  
 お。事。

此年乃二月十四日。志。狀。あり。あ。し。す。い  
 の。時宗一人。文永十年二月十四日。藤原  
 在判。光綱。是。日。朗。の。筆。入。く。ひ  
 龍。門。入。道。行。兼。在判。清長。在判。行平  
 在判。光綱。在判。是。日。朗。の。筆。入。く。ひ  
 龍。門。入。道。行。兼。在判。清長。在判。行平  
 在判。光綱。在判。是。日。朗。の。筆。入。く。ひ







まるきわんごんらみく佛乃あまふんご  
 張すんごすまごのしんご。越後の府中より  
 もののちまごひひごのちまご  
 月乃廿六日。鎌倉へ入給る。此時聖人の  
 年八五十三なり



主

七





吉野吉野





註書讚第五

重謁頼綱第二十六

同きや〜の四月八日。〜にて頼綱さまみし  
 の。頼綱、〜とをな〜の。やまひつら〜  
 けん〜し〜と。諸人座におり〜念佛無間〜  
 の。法門を〜。聖人經論をひきあ〜。頼綱  
 のい〜。念佛無間の法門を〜や〜  
 の。聖人な〜。な〜火を〜。風  
 求羅〜。身や玉土ら〜。念佛無間  
 々〜。念佛無間



禪宗や天魔さる。いづかよりも。真  
 言宗は祈禱とものじら。蒙古國のあり  
 一日や十日のいづか。十日のいづか。日  
 せ。其時頼細上使  
 文。月日のいづか。聖人のいづか。經  
 と作のいづか。頼細のいづか。西海門の寺と死つる。  
 愛珠堂の別當のいづか。寄進の一千町。

あり。天下の清きなり。あつたれ。や  
 あり。聖人のいづか。清きなり。あつたれ。や  
 念佛のいづか。あつたれ。座と  
 ちのいづか。天下をいづか。あつたれ。や  
 あり。





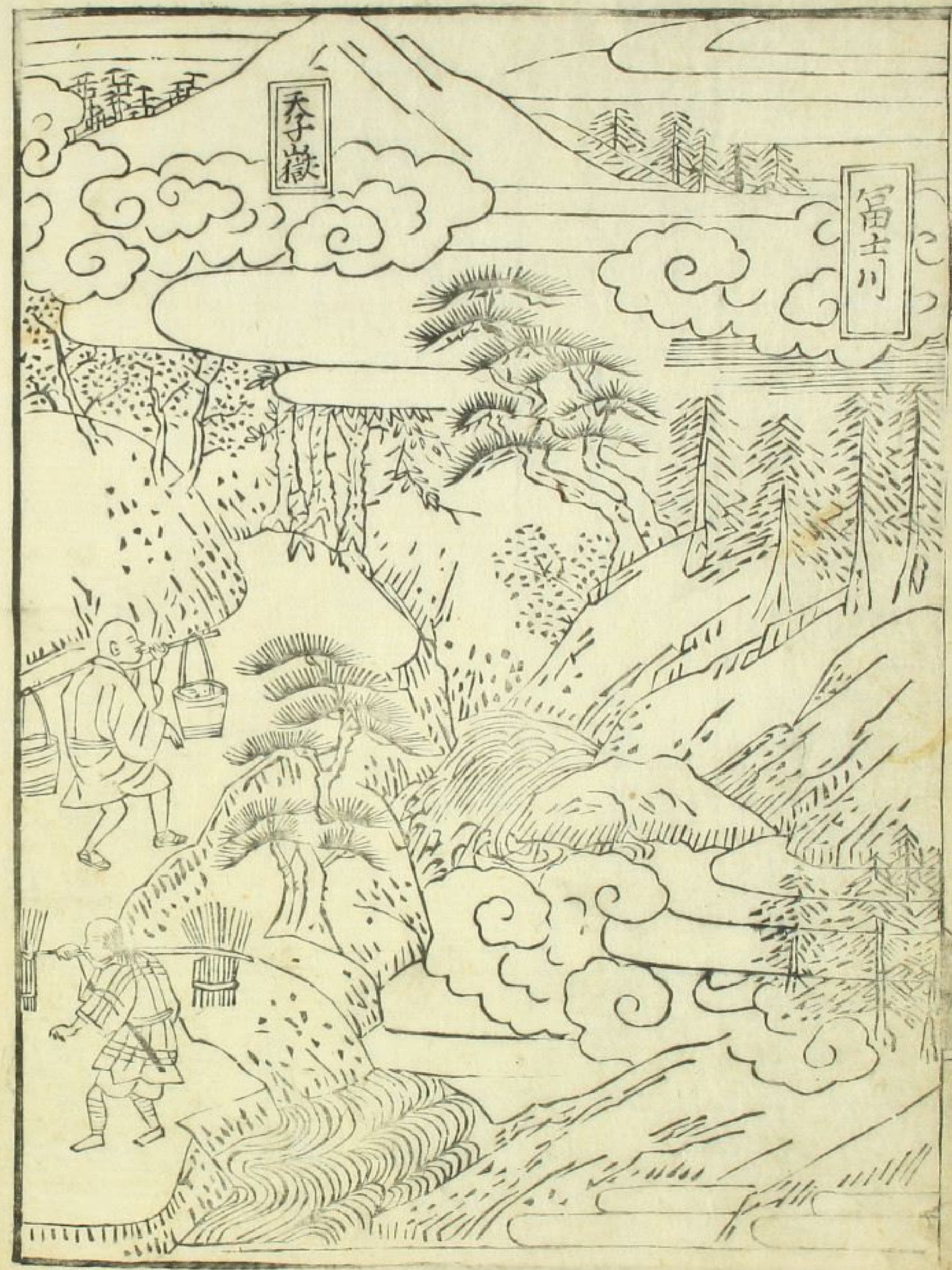


嶽雲とけしけし西も七面嶽のてしとて  
 つららつらつら白嶺嶽のてしとて霞  
 らのよみとてあやうし。せしとて雨のあし  
 もやまうたのたを本尊もくし。晴し  
 かすこの夜や。この月とてまらし。經書とてし  
 せしとてあやうし。ひさし讀誦のし  
 ころへ。床の東とてあやうし。解脫の  
 ころのころ谷。水とてくし。真性の月とて  
 らし。うらる山路もたてし。孫康の  
 雪照をよゆりへのまや。風もきし。

忍辱の衣をよき。衆論談しとて山中  
 さしとて夜のどく。法華讀誦のしとて天  
 ひびく九年のあし。妙法華經と讀誦のし  
 也。靈鷲山のあし。聖人ぬき。佛  
 菩薩のすし。のみにまら。おがし。月  
 日夜をくし。讀誦しとて。法華經の  
 とく。虚空のあし。身延山  
 のあし。

たらし。法乃の山風





主...  
...  
...

富士川  
...





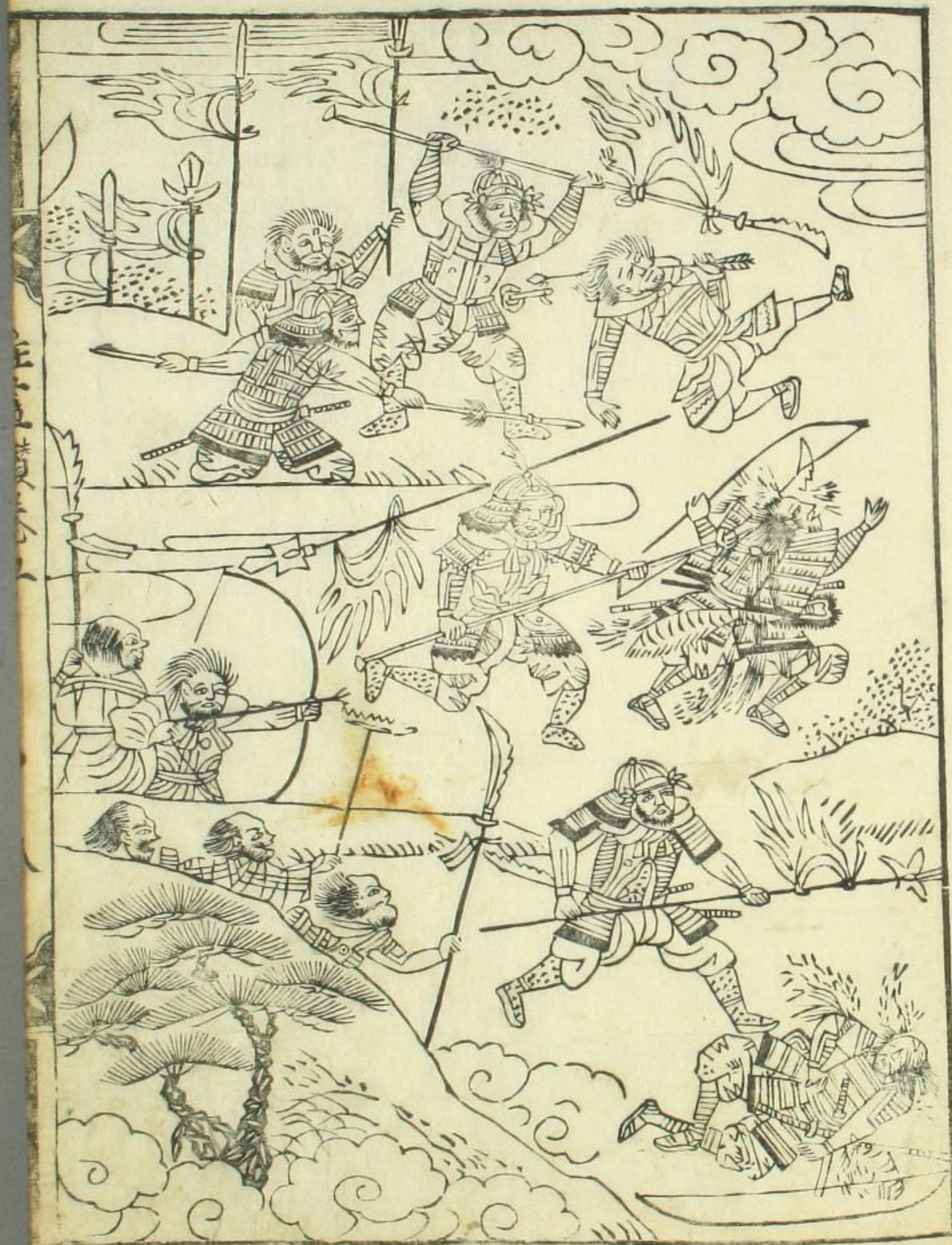


蒙古來第二十八

同<sup>おと</sup>壬午十月五日の卯<sup>う</sup>刻<sup>く</sup>。對馬國府の八幡宮<sup>やま</sup>の假殿<sup>かりや</sup>の内より大<sup>く</sup>火焰<sup>えん</sup>のつ。おちり。十日のあくる。對馬の西<sup>し</sup>佐<sup>さ</sup>浦<sup>うら</sup>。異國<sup>いこく</sup>の兵船<sup>へいせん</sup>四百五十艘<sup>せう</sup>。二万餘人<sup>にまんにゆうじん</sup>とのつ。ふせき。六日。の刻<sup>く</sup>。合戰<sup>あわせ</sup>も。守護代<sup>しゆごだい</sup>資國<sup>すけくに</sup>も。蒙古<sup>まうこ</sup>と。ととのあはれ。資國<sup>すけくに</sup>の子<sup>こ</sup>も。とく。とく。死<sup>し</sup>す。同日<sup>どうじつ</sup>。壹岐嶋<sup>いちぎじま</sup>へ。守<sup>し</sup>護<sup>ご</sup>代<sup>だい</sup>平内<sup>へいうち</sup>左衛門尉<sup>ざゑもんゑい</sup>景隆<sup>かげりゆう</sup>。城<sup>じやう</sup>を。入<sup>い</sup>ち。ひ。景隆<sup>かげりゆう</sup>。

が。い。も。か。ら。の。嶋<sup>じま</sup>の。百<sup>ひやく</sup>姓<sup>せい</sup>も。男<sup>おとこ</sup>を。と。り。女<sup>め</sup>を。と。り。手<sup>て</sup>を。と。り。あ。な。も。と。り。ゆ。ひ。を。つ。ぬ。も。一<sup>いち</sup>人<sup>にん</sup>も。と。り。ま。り。つ。り。肥<sup>ひ</sup>前<sup>ぜん</sup>国<sup>くに</sup>松<sup>まつ</sup>浦<sup>うら</sup>。数<sup>かず</sup>百<sup>ひやく</sup>人<sup>にん</sup>。同<sup>どう</sup>壬<sup>にん</sup>女<sup>にょ</sup>九<sup>く</sup>日<sup>にち</sup>の。刻<sup>く</sup>。大<sup>おほ</sup>友<sup>とも</sup>出<sup>で</sup>羽<sup>は</sup>の。守<sup>し</sup>直<sup>ちか</sup>泰<sup>やす</sup>。大<sup>おほ</sup>友<sup>とも</sup>の。次<sup>つぎ</sup>郎<sup>らう</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>重<sup>しげ</sup>秀<sup>ひで</sup>。難<sup>なん</sup>波<sup>なみ</sup>の。二<sup>ふた</sup>郎<sup>らう</sup>在<sup>あ</sup>助<sup>すけ</sup>。菊<sup>きく</sup>池<sup>いけ</sup>の。二<sup>ふた</sup>郎<sup>らう</sup>康<sup>やす</sup>成<sup>なる</sup>。あ。い。く。九<sup>く</sup>國<sup>くに</sup>の。民<sup>たみ</sup>の。あ。い。ま。ら。し。ゆ。へ。し。ま。ら。し。の。う。も。お。り。な。ま。ら。し。夏<sup>なつ</sup>日<sup>ひ</sup>蓮<sup>れん</sup>の。ま。ひ。こ。と。す。ま。ら。し。む。じ。ら。し。







龍象房第二十九

龍象房とつひのあり。洛中へく人をくらふの  
 う。ろろしの間山門より住所をなごししあひ。そ  
 身をとりちしとてお祈り。おせしし命をうぐも。  
 鎌倉よりくつと。人の肉とくくぬ。大佛殿のう。  
 桑り谷りして。説法し。不審あし人ち。ささるる問  
 答もへしと。ひろくすつとつと。佛のこく。たつと  
 みゆへし問答も及のる。志りつと。建治三  
 年六月九日。日蓮のゆかり。二位公日心と云。信  
 一もゆき。種もれ難問と奉処も。もせ答り



龍藏坊



示寂第三十

弘安五年壬午。九月八日入午の刻。身逝入るをのりく。ちも山もをらる。九日。大井。十日。曾祿。十一日。黒駒。十二日。河口。十三日。小呂地。十四日。竹下。十五日。関本。十六日。平塚。十七日。瀬谷。十八日。武蔵国荏原郡。千束郷。池上村。石衛門。太夫宗仲の宿。入の。月。廿五日。鎌倉。より。来る。おひ。且那。安国論を。よ。と。さ。う。を。め。ひ。三十七日。の。う。り。我身死す。其時。地神。ひて。い。く。身。と。ゆ。ふ。を。見。を。り。つ。く。わ。が。死。し。と。成。志。す。う。の

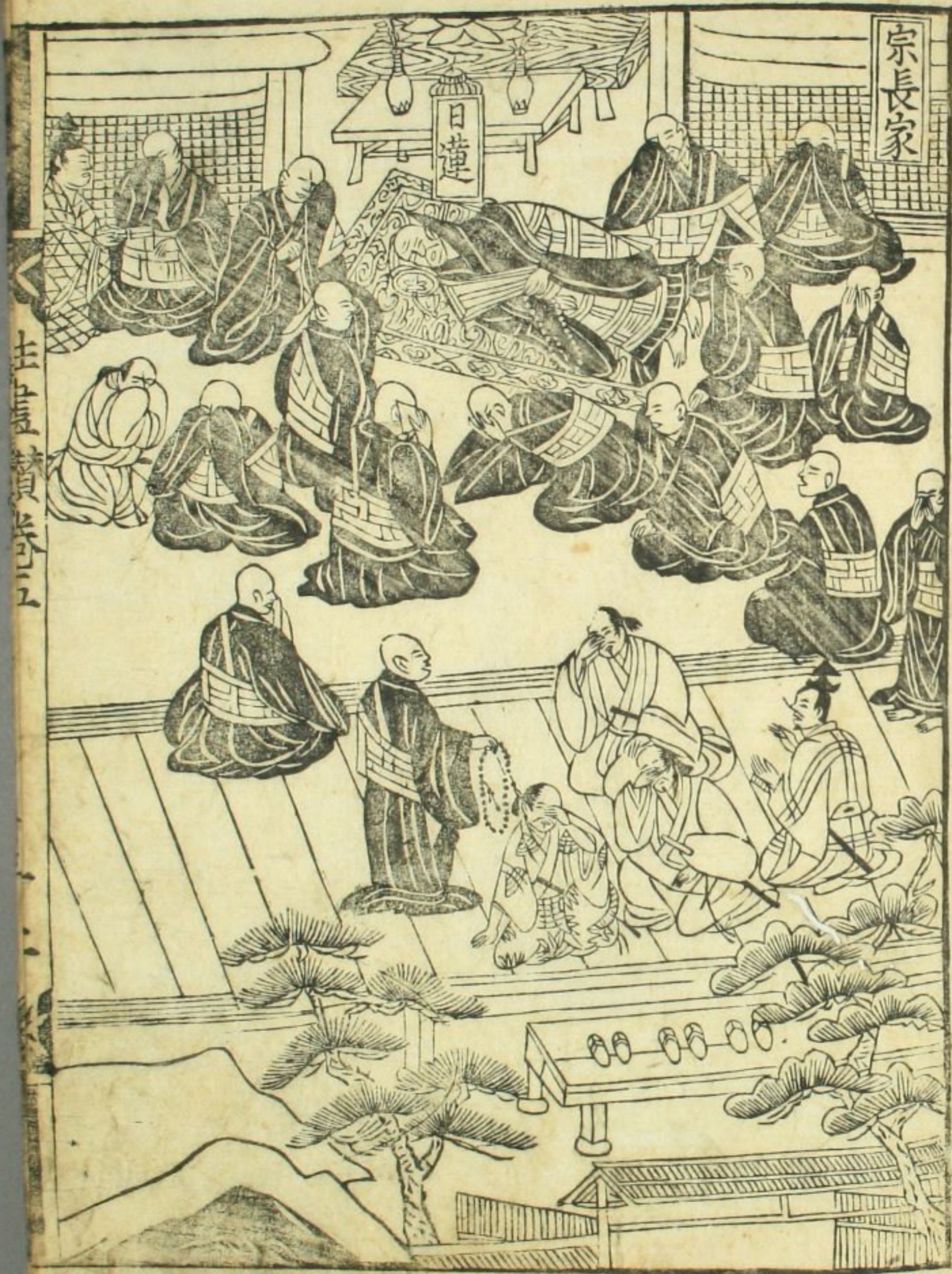
所を。し。身。逝。山。も。ち。る。の。終。其。後。山。の。く。し。乃。時。日。朗。お。り。は。死。り。我。死。す。死。骸。を。か。め。入。身。逝。山。を。く。れ。日。朗。の。ま。り。く。一。日。半。日。の。道。な。り。し。作。り。仕。へ。し。道。す。く。れ。四。五。日。も。を。よ。志。う。と。ま。う。が。う。志。う。し。入。国。を。も。り。佛。存。生。の。間。と。へ。道。を。も。り。し。ひ。を。ま。び。奉。つ。と。佛。ゆ。い。ろ。を。の。こ。さ。び。身。逝。山。を。く。り。上。行。へ。む。聖。人。の。つ。も。と。ろ。れ。も。可。悲。と。作。り。此。佛。遺。言。を。他。を。池。上。に。葬。送。申。身。逝。山。を。く。り。の。み。なり。佛。遺。物。を。法。華。



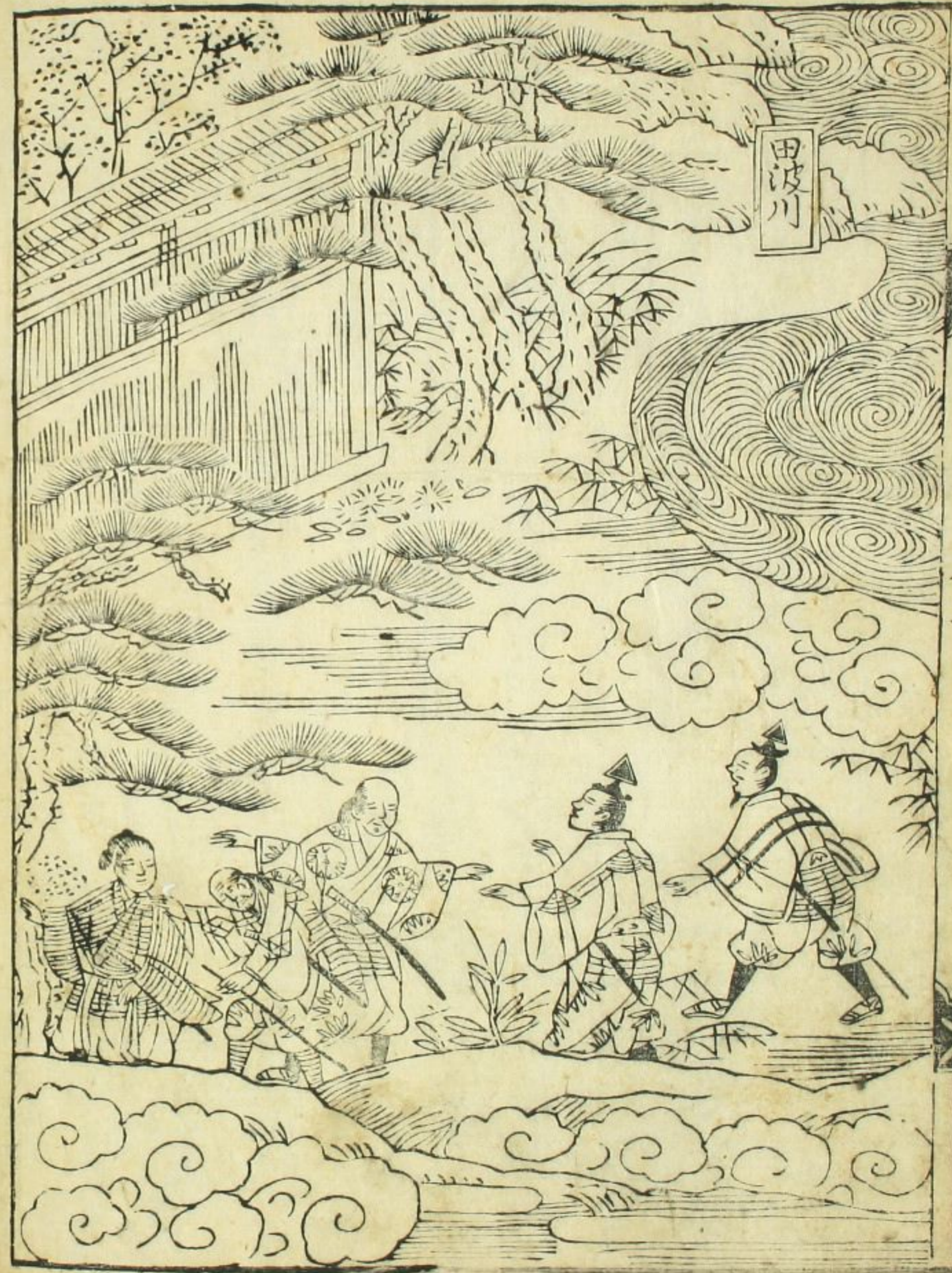
經一部十卷。日昭。金色乃立像の釈迦。日朗。  
終や畧也。十二日のたのこく。方便品と誦  
ト。大衆同音。是とよむ。又佛知見道此所  
す。佛入滅をのく。きここのく。とありけ  
奉つ。又棺十四日乃いぬのこく。日朗これをつとむ。  
だびを祓のこく。だび乃次第の前。日朗。迹。日  
昭。まへうろをのく。八人なり。これ執尊。靈  
鷲山。法華經とたのく。灵山のうし  
と。もあ。り。若提河のたのく。沙羅林  
ち。滅。入の。聖人を。身処山。法

華經とよむ。ひて。の山。田波川乃がとる。池上乃む。入滅。佛法の。説法の。声。川。風。山風の。たのひとあり。



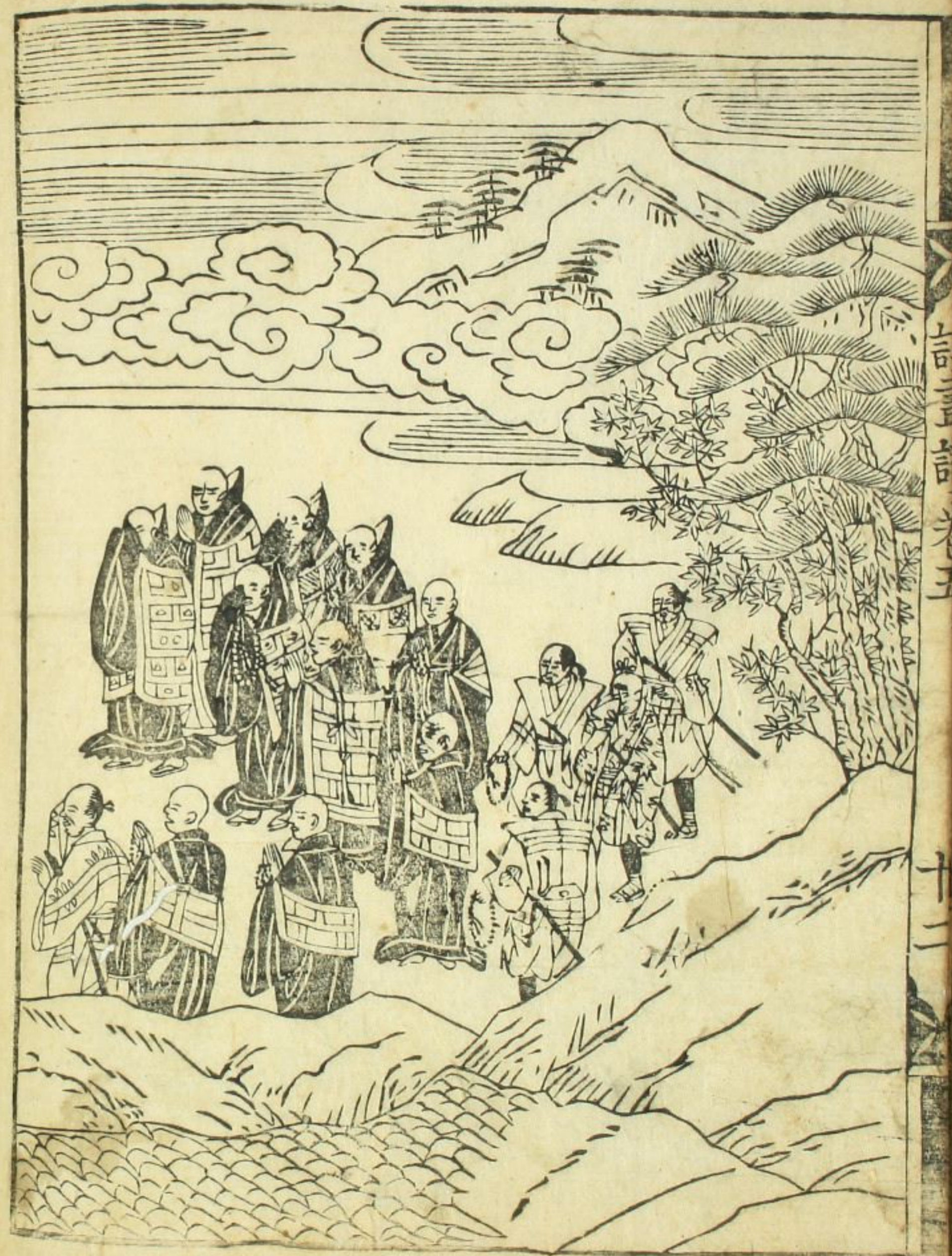


土屋實宗

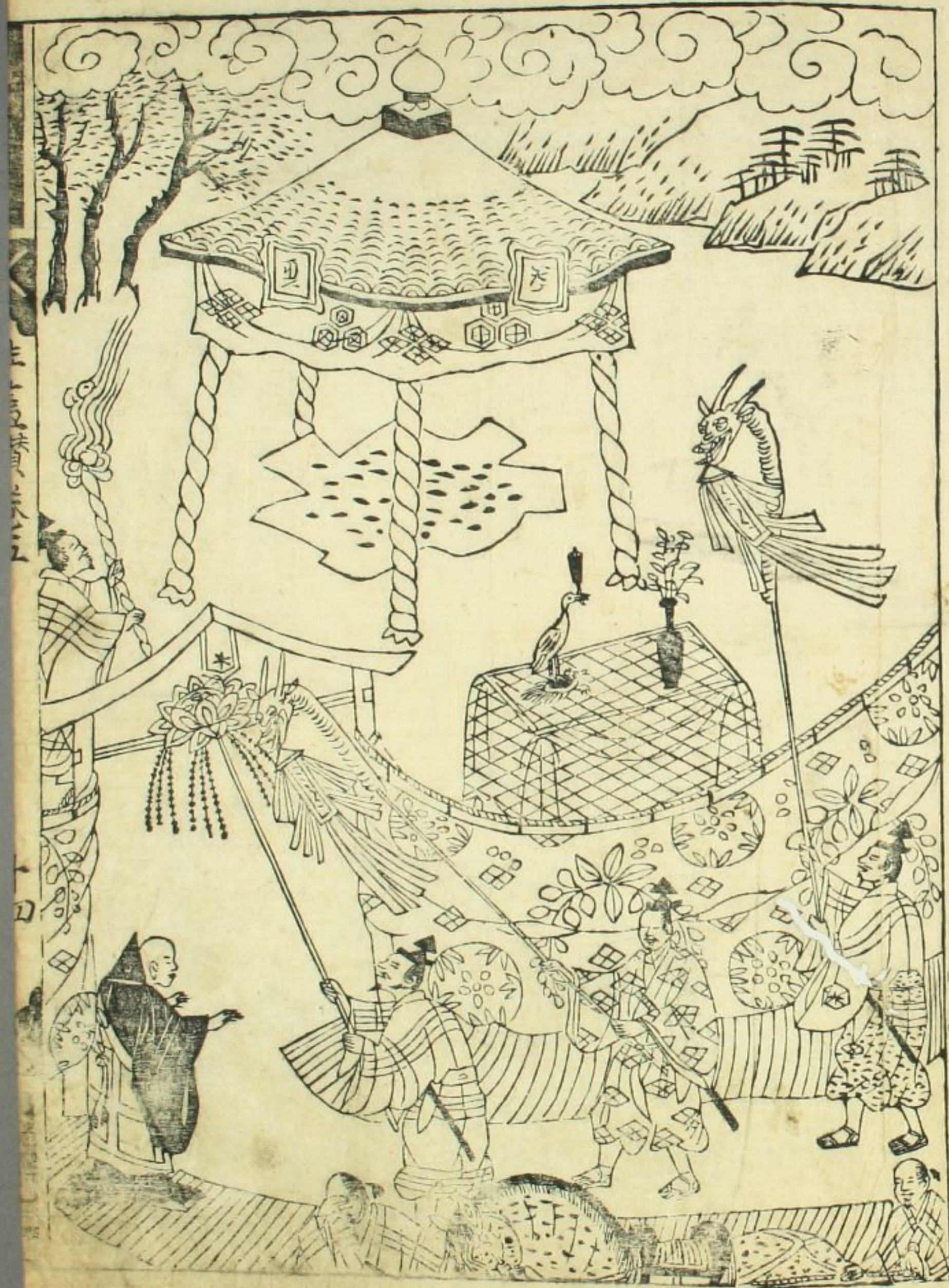


土屋實宗





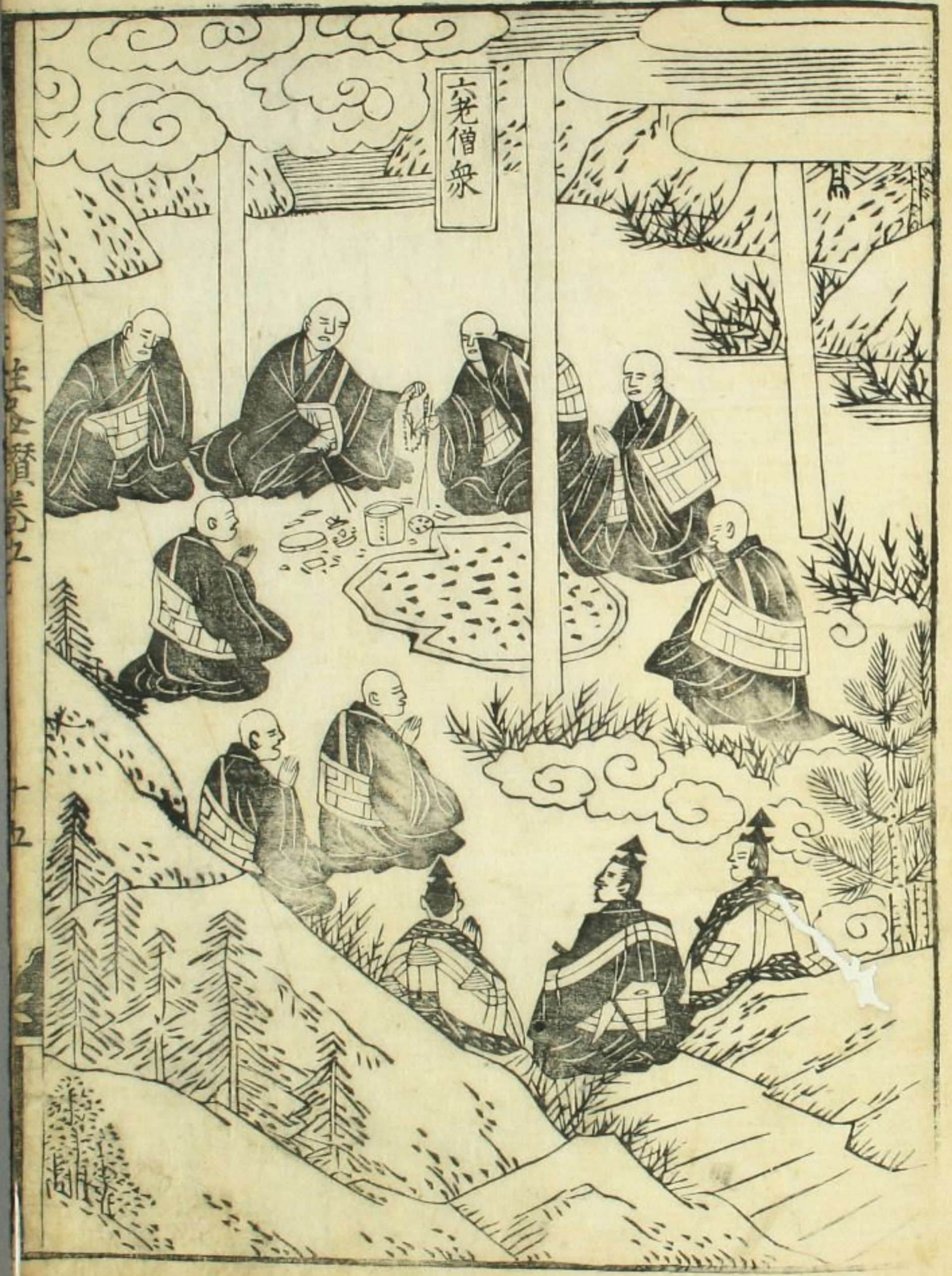






叔取遺骨第三十一

其後火をのつぐたひ。火さきしれりつぐ。遺骨とおとめとる。釈迦如来入滅後。迦葉おれる者。舍利をひろふ。遺命のしぐ。身延山をくぐ。同まき廿一日。池上へ出て。飯田よとちり。廿二日。湯本。廿三日。車返。廿四日。上野。廿五日。南條七郎家。廿六日。身延山。同二十九日。日法。影をさあび。四十九日。堂へつぐ。百ヶ日。廟をくぐ。骨を入奉ふ。



老僧衆

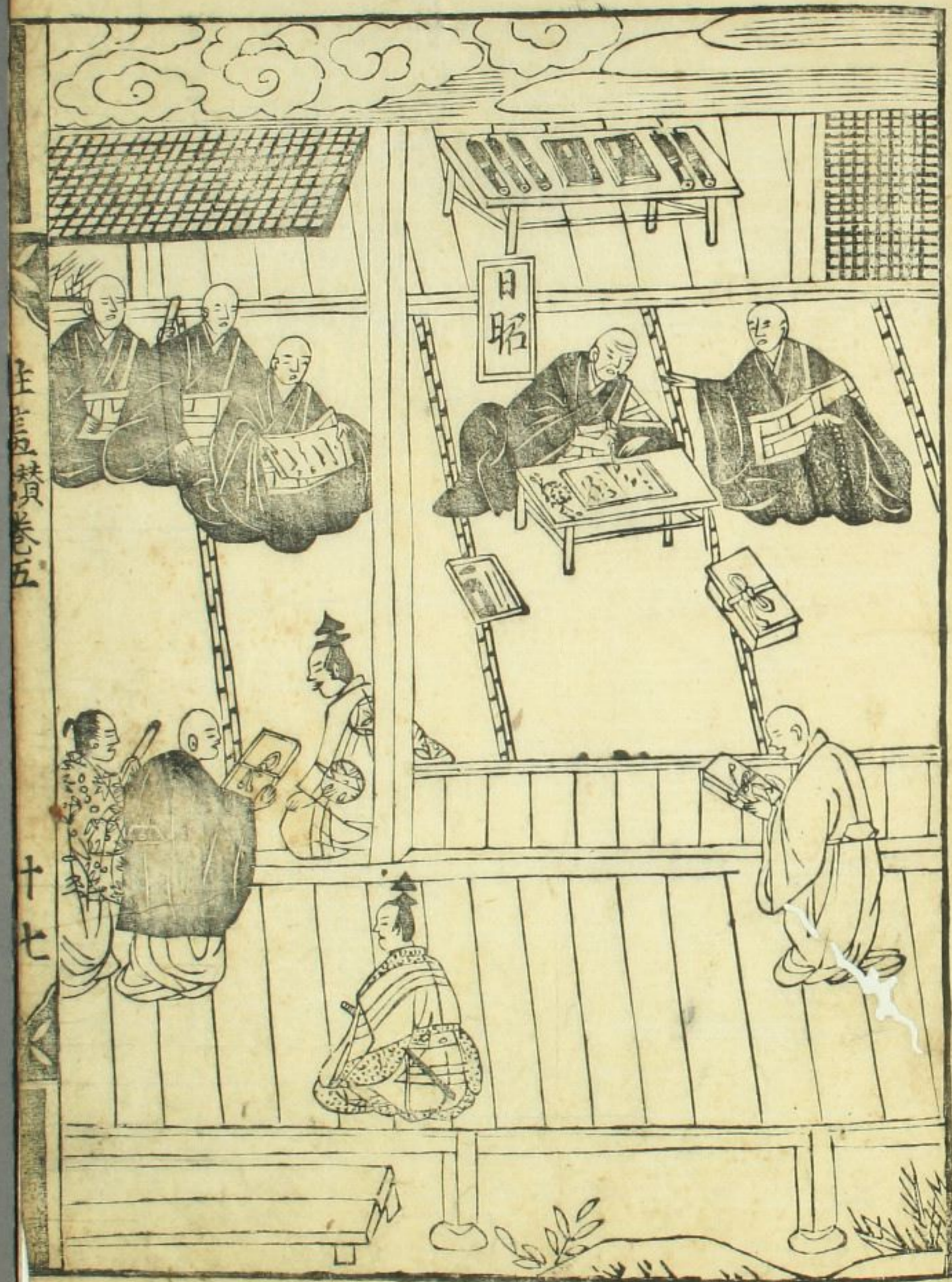




佛書目録第三十二

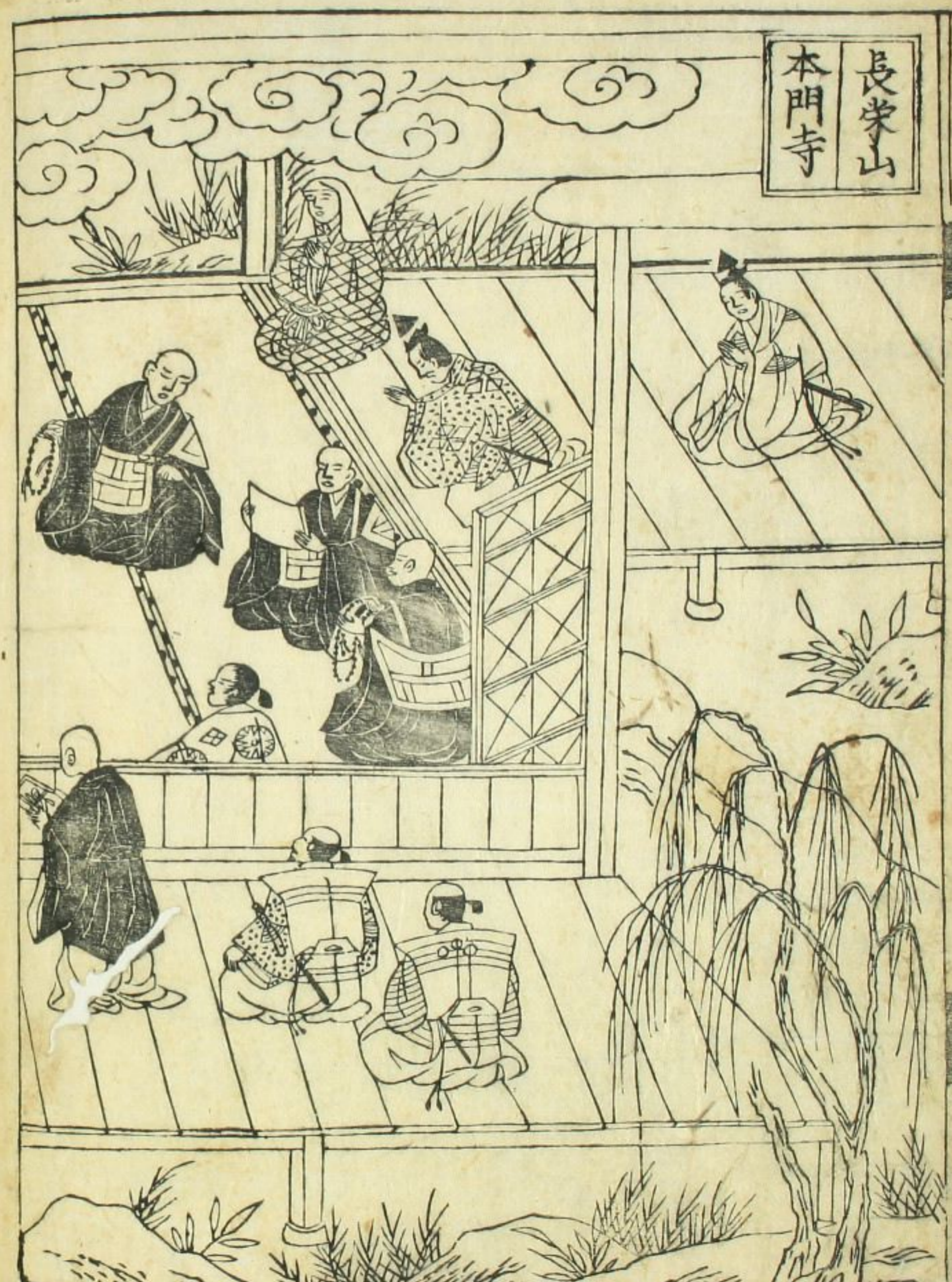
弘安六年二月、聖人入佛書持集を総し  
 事々悉其数とびて一周忌持来るべし  
 目録に入へし由是をのりかとも依之僧俗をのり  
 武蔵國池上長榮山本門寺に持来る。日昭筆  
 取し合て百四十八通。定此外まことの書な  
 り。衆義とのりかともなやましく目録に  
 入へし。六老僧同心の儀も。同年  
 十月十二日。各加判あり。或後より。才三年の  
 目録の七百余條。才七年の目録の千余條共のり





生... 卷五

十七



生... 卷五

十七



歸命頂禮諸三寶  
上行餘風扇來際

妙法注雨潤十方  
法界衆生共成佛



